科学哲学・科学思想史

2011年度第1回(2011/10/05)へのコメント

Q.0　何故ラッセルらのテクストを使って「科学」の意味をとろうとするのか？
A.0　特に，ラッセルでなければならないことはありませんが，一般に使われる英語の「サイエンス」の意味がわかる用例として取り上げたまでです．

Q.1　「純正科学」の意味が理解できません．
A.1　資料を見ればわかるように，「抽象的科学」と同じもので，数学や幾何学などのこと．パスカルのテクストでは，「外界の事象を対象とする科学的知識」と言われている．

Q.2　「領域科学」という語の意味は何か？
A.2　「物理学」の「物理」や「法学」の「法」のように，その「学」が対象とする「領域」が限定されている「学」を「領域科学」とか「個別科学」という．この表現の背後には，「学」が対象とする「領域」を限定しない「哲学」とか「問答法（ディアレクティケー）」などが想定されている．

Q.3　結局のところ，哲学とは科学の領域に入るのですか？もし入るとすれば，どこまでが科学なのか？
A.3　科学と哲学のそれぞれの定義によって異なります．

Q.4　講議のレヴェルについて，非専攻生でも大丈夫ですか？
A.4　大丈夫，だと思います．

Q.5　評価方法や試験はどのように行われるのでしょうか．
A.5　原則として出席はとりませんが，質問を書いてもらうことで出席状態は把握できます．筆記試験で知識を確かめるような講議ではないので，参考文献を各自が読み，各自に問題設定をしてもらって，レポートの提出を求めるつもりです．基本的に，レポートの出来で評価しますが，レポートの出来があやうい人には，質問と出席状態を加味して評価します．

Q.6　要望としては，プリントが文章の羅列で見にくいので読むのがつらいため余白をつくってほしいです．
A.6　必要な情報を限られた紙面に載せるとどうしてもこうなります．

Q.7　p.124以降，先生は「科学」を「シアンス」と読まれていたので，（英）の「~~シ~~サイアエンス」とは区別しているのかなあと思って，サイエンス - シアンスの対比ではなかったの？と思いながら聞いていました．
A.7　p.124以降は，パスカルのフランス語（シアンス）を引用しているので，「シアンス」と読んだのですが，英語の「サイエンス」の影響で，フランス語の「シアンス」もほぼ同じ意味で用いられるようになっています（サイエンス＝シアンス）．しかし，ドイツ語のヴィッセンシャフトは，ちょっと違っている，というのがポイントです．

Q.0　科学を哲学と結びつけて考える意義は何なんでしょうか？個人的イメージでは，哲学は，「人とは何か？」などを追求する感じを受けます．
A.0　学（問）としての哲学が対象とする領域は広いので，そのうちに，「人とは何か？」を含みますが，論理学や数学など，ほとんど自然科学と言ってよい対象を考察する哲学の分野があります．

（自然の法則について）
Q.1　記述説がいまいちよくわかりませんでした．
Q.2　３の記述説，４の規約説という２つについてはあまり理解できませんでした．
Q.3　４つめの規約説というのがよく分かりませんでした．
A.1～3　これから実際に，ホワイトヘッドのテクストを読んで，確認していってほしいが，これらが何らか理論であると思うとわからないことになる．記述説は，別名，実証主義とも言われるが，文字通り，記述されたものが法則だというだけのことであり，規約説は，法則というものは，（それを認める人たちによる）約束事だ，というだけのこと．それのどこが自然法則なのか，といえば，それだけのことである，と答えるしかない．

Q.4　４つの説が重なる部分があるという点を説明してほしい．
A.4　排他的な区分ではないので，どの面を強調するかの違いがあるだけとも考えられる．

Q.5　４の規約説以降，現在の学界はどういった見解，議論がなされているのか．
A.5　ホワイトヘッドの「自然の法則」についての４区分は，実は，学問領域を自然科学に限定しない普遍的な（つまり，領域学，個別学に限定されないという意味で，哲学的）区分なので，現在でも有効である，と赤井は考える．しかし，個別学の領域では，例えば，典型的なのは，物理学などでは，法則をそう理解するかについては，歴史的に見て，帰納主義，実証主義，現象論（これら３つは共通して経験的見地にたち，観察可能な経験への還元主義をとる）に対して，規約主義，道具主義（これらは，経験的見地にたちながらも，観察可能な経験への還元ができない理論的仮説，理論的存在も認める）が現れた．さらに，個別的な理論だけでは問題にならず，理論全体を考慮しなければならないとするホーリズム（デュエーム，クワイン）が主張された．そして，1970年代までに，ハンソンの「理論負荷性」が唱えられたが，私見によれば，これはすでに，別の表現で，ホワイトヘッドが prehension，cutting-offということで述べていたことである．さらに，クーンによって，理論の「通約不可能性」とパラダイム転換が説かれて，ある種の科学的相対主義が現れることになった．一方で，何らかの実在を認めると主張する「科学的実在論」とこれに反対する「反実在論」の立場が共存している．

（「自然」と「神」または「超越者」について）
Q.6　「自然」とは一体何を指すのか，疑問である．
A.6　わからない，というのが解答である．しかし，わからないから，探究するのであって，（探究の出発点においては）定義はできないが，そのための手がかりとして，さしあたり，「宇宙」「世界」と並んで「自然」として一般に人々によって理解されているものを対象としている．

Q.7　「神」や「超越者」という風に使い分け（？）がなされているように思われました．
A.7　意図的に，使い分けているときがあります．

Q.0　できれば質問への解答に終止（ママ，終始？）せず，講議を進めていただきたい．
Q.1　今日は前回の質問で終わってしまいましたが．．．
Q.2　今日の授業ではQ.5への回答が中心だったようですが（もっと説明や資料が欲しい）
A.0〜2　何かの資格試験のように学習範囲が決まっているわけではないので，諸君の理解度・反応次第で，予定した講議内容が変わるのもあり，と思っています．質問と答のやりとり（問答）を楽しむ心の余裕があるといいですね．

Q.3　この授業で取り扱う科学と哲学とは，一体どのようなものなのを指すのかがしっかりと理解できている自信がありません．
Q.4　まだ「自然」をどのようにとらえていいかよくわかりません．
Q.5(=A.3,4)　この授業で扱うテーマに限りませんが，哲学における諸問題には，結局のところ分からないことばかりなので，「なんだ結局答えられないのかよ」みたいにな風に．去ってしまう人も少なくないのでしょうが，たまたま残ってくれた人が，今後も哲学を続けることになるんだろうなと思いました．
A.3〜5　Q.0〜2にも言えることですが，分からないことを分からないこととして，持続して持ち続けることと，同時に，それを自分でも調べ，考えつづけることができればよいと思います．

Q.6　記述説から規約説への転換は，法的なものを例にして考えてもよいのでしょうか．
A.7　「記述説から規約説への転換」という表現は正確ではないことと，「法的なもの」の意味が分からないので，答えられませんが，部分は分かっているが，全体は知らない（しかし，全体があることを予想はしている）ということなら，ホーリズムの考え方で対処できるかもしれません．

Q.7　ホワイトヘッドは神を認めている立場で理論を展開しているのですか？
Q.8　自然，または科学を考える上で，その出発点として神の存在は無くてはならないものですが，無神論者の人の場合，この部分についてはどう考えるのでしょうか．
A.7,8　いずれも，何を「神」とするか次第ですが，はじめから前提しているわけではありません．無神論の場合も，賦課説以外は，神なしで理論は成立します．

Q.9　「科学的実在論」と「反実在論」についのそれぞれの立場について，もう少し詳しく知りたいです．
A.9　簡単に言えば，「科学的実在論」は，原子や電子など直接観察できない理論的存在が実在的根拠をもって存在する，とする立場で，それに反対する立場が「反実在論」です．観察可能な経験的事象を科学的知識の唯一の根拠とする還元主義（帰納主義，実証主義，現象論）は「反実在論」つながります．

Q.10　ハンソンの「理論負荷性」から言うと，キリスト教徒が理論を立てると「神」がどうしても入ってきてしまうのでしょうか．
A.10　ハンソンが取り上げている「理論」は，信仰を考慮していない．ハンソンによれば，物理学の観察において感覚与件を純粋無垢に知覚するというようなことはあり得ず，それは，（観察者のもっている何らかの）理論を背負って解釈する，というレヴェルでの話である．

Q.0　少しわからなかったのは，「理神論」の内容です．
A.0　別途，考えてみましょう（プリント，p.141）．

Q.1　「課せられたものとする説」があまりよくわかりませんでした．「神」という絶対的存在から与えられた「自然」であるにもかかわらず，その神は何ものともかかわりを持たない独立した存在であるというすごく矛盾な気がするのですが．
A.1　Q.0の理神論的賦課説として考えてみて下さい．

（内在説について）
Q.2　「内在説」における神は単なる構成要素に過ぎないということだったが，その例として挙げられたプラトンの『ティマイオス』におけるデーミウルゴスは世界・宇宙をつくる働きあるいは法則の一部と考えてよいのか．
Q.3　「内在説」での神の立ち位置がいまいち分からなかったです．神は一般に超越的な存在と思うのですが．
Q.4　内在説における「絶対的存在」が神ではない，つまり，いないのだとするならば，一体何が内在説界において第一の存在なのかが疑問です．

（賦課説とプラトンの『ティマイオス』について）
Q.~~4~~5 もしデーミウルゴスがイデアを手本としているのなら，そのイデアはどこから生じるものなのか．．．
Q.~~5~~6 デーミウルゴスが制作者，神とされていたのが分かりにくかったです．デーミウルゴスも賦課説では外側のもの，ということでしょうか．
Q.~~6~~7 イデアとは一体何なのか？と思いました．神とイデアに関係はないのでしょうか．
A.2～~~6~~7 後のほうで(翻訳では，p.512上段，p.524上段)，ホワイトヘッド自身が言っていますが，プラトンの『ティマイオス』は，ホワイトヘッドの区分では，「内在説」にも「賦課説」にも解され得るのです．

Q.~~5~~8 ニュートンが，非科学的存在の「神」を話題に出すことに驚いた．
A.~~5~~8 17世紀と18世紀の大きな違いです．このことを知らない人が多いとすれば，日本の高校までの教育内容に問題があるのでしょう．

Q.~~6~~9 ラッセル，ウィトゲンシュタイン，ホワイトヘッドの３人は同じような分野の研究者なですか？そしたら，どのような立場をとっているんですか？
A.~~6~~9 ちょっとずつ違いますが，３人とも広い意味で科学哲学者で，ホワイトヘッドとラッセルは一緒に本を書き，ラッセルとウィトゲンシュタインも師弟関係にあります．

Q.~~7~~10 エピクロスの自然法則の見方からすれば，内在説のほうに分けられるのだろうと思いました．
A.~~7~~10 エピクロスについては，次の「記述説」を見てから，もう一度考えましょう．

Q.0　Dudenの理神論の記述では，„Gottesauffassung der Aufklärung“と時期を限定していますが，他の辞書では限定されていませんが．．．
A.0　Dudenだけでなく，BrockhausのLexicon（百科事典）でも，die Anschauung der Aufklärung, daß Gott nach der Schöpfung keinen Einfluß mehr auf die Welt nehme und zu ihr auch nicht in Offenbarungen spreche. 神は創造の後はもはや世界になんら影響を及ぼさず，また世界（の人々）に啓示によって語ることはない，という啓蒙（期）の直観，となっています．問題の理神論は，発想としては，古代からあったとしても，歴史的には，啓蒙期にイギリスで主張されはじめたもの（Q.1を参照）を指すので，ドイツ語圏の辞書はその点を強調しているのでしょう．

Q.1　スピノザなど汎神論のものは読んだことがあるものの，理神論の文章をあまり読んだことがないです．ボルテールとかコリンズとかでしょうか？今度文章にあたってみたいです．
A.1　歴史的には，17世紀半ばから18世紀にかけてイギリスで唱えられ，後に，フランス，ドイツの啓蒙期の思想に大きな影響を与えたとされます．イギリスでは，前期と後期に分けられ，前期は，チャーベリーのハーバートとブラウント，後期は，トーランド，ティンダル，ボーリングブルック，ウォラストン，モーガン，コリンズ，チャブらがおり，後にヒュームにも影響を与えています．フランスでは，ヴォルテール，ディドロ，トゥーサン，ドイツでは，ライマールの名が挙げられます．影響を受けたものとしては，ロック，ルソー，レッシングらがいます．

Q.2　啓示，というのは神がつくった法則からするとイレギュラーな現象全般という理解でいいのでしょうか．
A.2　理神論の立場からすると，彼らが認めない啓示というのは，奇跡や予言などで，それとは別に，イレギュラーと思われる現象は，未だ，自然科学的研究が進んでいないから，人間にはイレギュラーと思われるだけ，ということになります．

Q.3　レジュメp141最下段「Longman Dictionary of Contemporary English」におけるdeismの説明で"some message"とあるが，これは聖書や啓典を指すのか．
A.3　これも，理神論が認めない啓示のことなので，聖書そのものではなく，奇跡や予言などです．

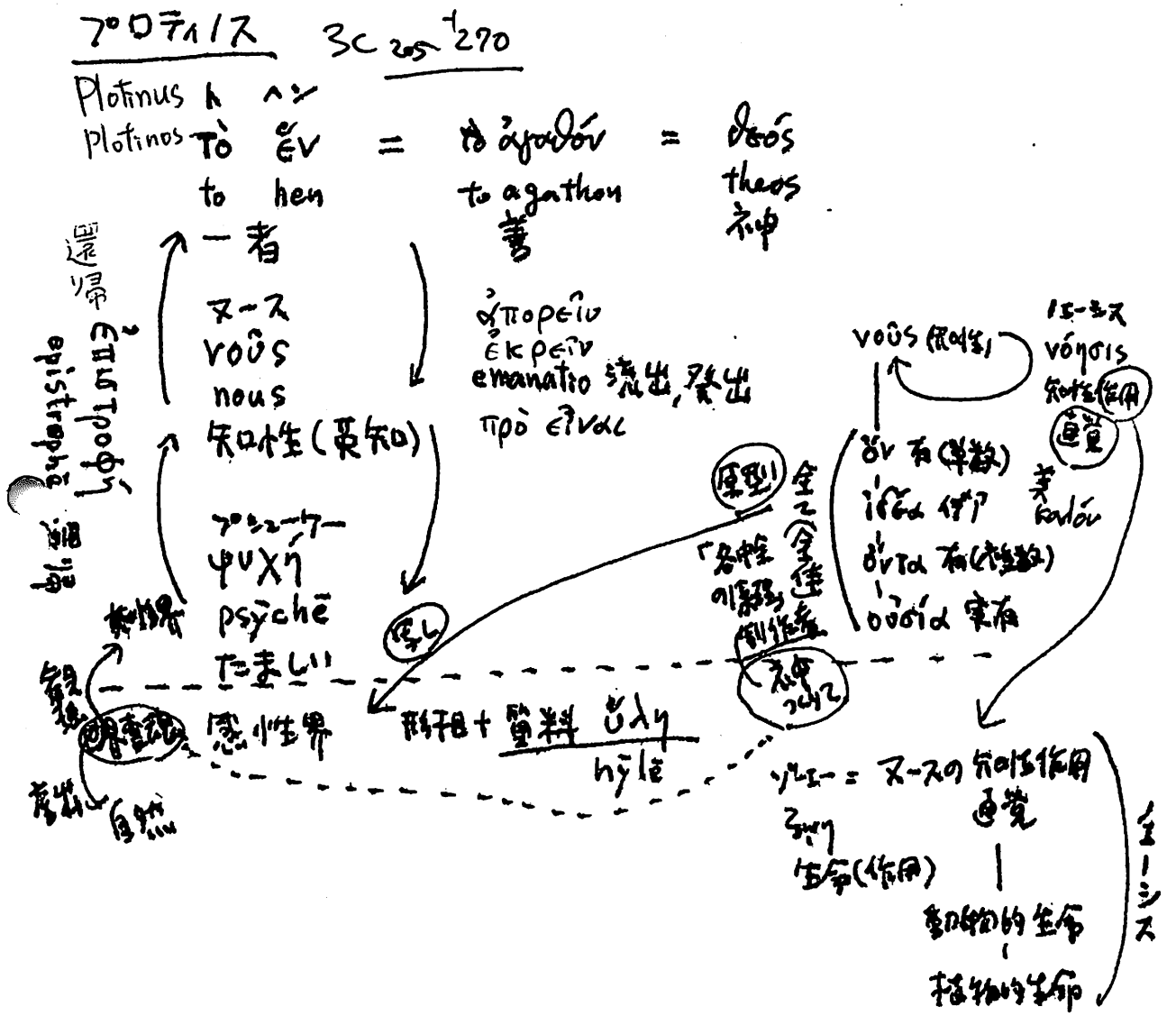
Q.4　世界を創造して後は影響しないなら，なぜ神は世界を創造する必要があったのだろうか．
A.4　これはすでに神学的問題ですが，神の善性から世界を創造した，というのが一応の答でしょう（資料参照）．

Q.5　プラトン『ティマイオス』におけるイデアは「真理」または「不変のもの」と言い換え得るか．
A.5　「真理」の定義によるが，イデアは「不変」であるとは言える．

Q.6　哲学者は特に証拠を必要とせず，自分の思うままに法則や世界を考えてよいのか？
A.6　それでは，学としての哲学が成立しないのでよくないでしょう．

Q.0　神が「意志」するということがいまいちよくわかりません．
A.0　人が「～したい」と思うときと同じように，文字通り，神が「～しよう」と意志することである．人の場合は，意志の自由を認める立場と，意志の自由を認めない決定論の立場に分かれるが，神の場合（神の存在を認める場合）は，無限に自由であると考えられる．

Q.1　神学における神と，哲学で一般的に言われる神は別のものであるという認識で良いのか．
A.1　キリスト教の神学における神は，キリスト教の神であり，イスラームにも神学というべきものがあり，そこでの神（アッラー）は，イスラム教の神であり，例えば，アリストテレスが神というときは，アリストテレスの宇宙論における究極的存在としての神なので，それぞれ別のものである，と言える．



Q.0　「思惟の思惟」はちょっと理解しずらかったのですが．．．
Q.0'　「不動の動者」の意味がよくわかりませんでした．
Q.0''　神は神自身を思惟するのだ，とアリストテレス的な考えのなかで言われていましたが，思惟の内容については問われないのですか．
A.0　自分で，アリストテレス『形而上学』の第12巻を読んでみてください．その際，知っておくべきことは次のようなことです．ギリシア人には，同じもの（同種のもの）によって同じものが知られる，という前提があると思われます．さらに，より上位のものは下位のものに影響を与えることはできる，という発想があるように思われます．そして，生成消滅（変化）しないもののほうが，生成消滅するものよりも，より優れた在り方である，と考えられているようです．これらのことが分からない人にとっては，「不動の動者」，つまり，自分は動かない（変化しない）で，他のものから愛されるものとして，他のものを動かす（変化させる）というアリストテレスの神は，何の意味もないでしょう．

Q.1　神とか絶対的存在とかくどいなって感じてしまいます．やっぱり哲学は科学だと言えない（言いたくない）ので，そのあたりを深めてみれたらと思います．
A.1　直接的な信仰の対象としての宗教的な神ではなくて，哲学的な，あるいは理論的要請としての神（アリストテレスの神のような）について言えば，精神科医でもあったヤスパース(1883-1969)の超越者や，クラウス・ミヒャエル・マイヤー- アービッヒの『自然との和解への道』(1984)の「自然」は，これにあたると思います．特に，後者は，神と言っていないだけで，中世哲学史を知る者から見れば，ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナ(9世紀）の「自然(natura)」と重なってくることは明らかです．

Q.2　海外の哲学者が独自につくった言葉を日本語に翻訳する作業は日本の哲学者がやっているのでしょうか．
A.2　明治初めの西周（にしあまね）の例を思い起こして下さい．（資料参照）

Q.3　これまでプラトンやアリストテレスの考える「世界の在り方」や「超越的存在」の話があったが，彼らの考えはどうして大きく異なるのか．根本的な問題がそこにあるのだろうか．
A.3　アリストテレスは，確かに，プラトンのイデアを否定する発言をしていますが，エレア派以来の生成消滅する世界（現象，現れ，パイノメナ）と，現象ではない実在（オン，オンタ，ピュシス）を峻別するという基本的発想は共通していると言えます．その意味では，一見，正反対に思えるプラトンとアリストテレスですが，実は，近い，あるいは同じであるとも言えると思います．

Q.4　プロティノスの「一者＝善＝神」という考えは，今まで扱われた神というものの考え方とは違った視点でした．キリスト教が一神教であることと，この考え方とは矛盾するのではないかと思うのですが．．．
A.4　一神教ということでは，直接，矛盾しませんが，キリスト教の「創造(ceratio)論」とプロティノスの「流出(emanatio)」とは，そのままでは同じではないので，キリスト教の立場から，プロティノスの「流出(emanatio)」説を取り込もうとすると，工夫が必要になるでしょう．実際，中世哲学史をみるとそのような試みがなされています．

Q.0　エリウゲナの「自然」は，何故４つに峻別されるのか理解できない．
Q.1　(1)「創造しかつ創造されない自然」と(4)「創造せず創造されない自然」がほぼ同意ということがちゃんと理解できません．(4)の一切の事物がむかってゆく目的というのがよくわからない．
A.0, 1　エリウゲナ(c.800/15-c.877)の「自然」が４つに分類されることは，区分の基準が「創造するか否か」と「創造さるか否か」の２つなので，機械的に４つになることは明らかですが，何故，この基準に従ったのかは，「創造論」と関係があると思われるので，にわかにはわかりません．さらに，プロティノスらの新プラトン学派の影響で，「発出」「滞留」「環帰」という流れを前提しているので，(1)と(4)が同じでなければならず，(1)「創造しかつ創造されない自然」と(4)「創造せず創造されない自然」は，「創造されない自然」（すでに最初から存在するから）としては同一であり，その同じものが(1)「創造したり」(4)「創造しなかったり」する，という形になっています．表現の上で，「創造したり」「創造しなかったり」と矛盾するように思われますが，そもそも，時間・空間があるのは，(3)「創造せず，創造される自然」だけですから，(1)(2)(4)は，時間・空間の概念が通用しないものなので，そもそも，同時に，ということが意味をなさないわけですから，同じもの（「創造されない自然」）が，「創造したり」「創造しなかったり」しても，矛盾でもなんでもないという論法でしょう．(4)の一切の事物がむかってゆく目的というのは，(1)→(2)→(3)と発出してきて，今，時間・空間の中で，(3)の段階にあるものにとっては，(1)「創造しかつ創造されない自然」=(4)「創造せず創造されない自然」は，(4)「創造せず創造されない自然」としてしか見えない，ということかもしれません．しかし，エリウゲナのテクスト(*Patrologia Latina*, Vol.122)は，彼に先立つ，５世紀末～６世紀始めの僞ディオニシオス・アレオパギタ(*Patrologia Graeca*, Voll. 3-4)，また，６世紀末～７世紀半ばのマクシムス・コンフェッソル(*Patrologia Graeca*, Voll. 90-91)を読んでラテン語に翻訳し吸収した上で論じているので，これらも参照した上でないと確かなことは言えません．

Q.2　プラトンのいう「説得」がなければ，逆になぜ，宇宙とその他の事物の相互関係が秩序に向かうことがない言えるのですか．
Q.3　p.504上段のところを読むと，科学の進歩の希望として賦課説を認めながらも，自然を説明する方法としては，あまり勧めていないようにも思えた．
A.2, 3　授業でも指摘したように，どうやら，Whiteheadのいう「内在説」は，少なくとも，プラトンの『ティマイオス』に関する限り，自然の法則が世界・宇宙・自然に内在しているから，それで安心というようなのんきなものではないようです．法則通りではないと人間には思われる，天体の不規則な動き，それまでも自然の法則の一部分だと思うにはあまりにも過酷な天災（火山の噴火，地震，島・陸地の海没など）を経験したことが，推測ですが，影響しているかもしれません．つまり，内在説にも，程度の差があり得るということだろうと思います．また，邦訳p.504上段についての指摘はその通りでしょう．賦課説を前提にした，自然の法則探究がもっとも説得力をもって進展したのは，その機械論的自然観においてでしたが，それは，17～18世紀までは言えても，それ以降になると，p.503に言及されている生理学や，物理学においても，単純な機械論的自然観が通用しない領域が注目されはじめると，法則の確実性は確率論的にしか主張できなくなりました（量子力学）．探究をする動機あるいは原動力としての賦課説は，有効であったけれども，それだけでは不十分である，とWhiteheadは感じているように思われます．

Q.0　感覚与件や同語反復がないと認められないと言われた当時の倫理学や哲学の研究者たちはどのように対応したのですか？

Q.1　先生は善悪をとはどのようなものと考えていますか？自分は善悪を想像上の価値観と捉えています．

A.0＆1　狭い意味での（学として扱う対象を狭く限定する）論理実正主義（ウィーン学団）に対しては，無視する（或いは反対する）人たちと，ある意味では，彼らの議論に巻き込まれて，対応に奔走する人たちがいました．対応の方向は，狭く限定された対象を何とかして拡張しようとするものです（別紙，京都大学医療技術短期大学部と和歌山大学での私の「倫理学」講義の資料を参照）．私としては，人為的約束・規約としての善悪は，現実のもの・判断としてあることは認め，その背後に，プラトンのイデア的な絶対的善があると考えるかどうかは，各人の自由ですが，私としては，あって欲しいと思っているけれども，ソクラテスやプラトンのように，確信はもてないでいます．その点で，アリストテレスと同じ立場かもしれません．

Q.2　ギリシア型精神性とヘレニズム型の精神性での「学」の違いとはどういうこ（と）なのですか？

A.2　ギリシア型の「思索(speculation)」とヘレニズム型の「学(scholaship)」という言い方はしているが，ギリシア型精神性とヘレニズム型の精神性での「学」という言い方はしていない．ギリシア型の「思索」は，すでに確立しているような形式の先入主に対しては不穏（で，前提から疑い，自由な思索を展開する）．それに対して，ヘレニズム型の「学」は，すでに容認されている方法論に厳重に留意する（ので，表面上は信念をなかなか変えない），という特徴がある．［これについては，前々回（12月07日），授業中に時間をとって，翻訳のpp.493上段～499上段を読み，解説を加えたので，質問者が出席していたのに，Q.2のような質問をするのなら，質問者の理解力と私の授業の仕方の両方かどちらかに問題がある，ということであり，もし，欠席していたのなら，このような質問をするということは，自分は欠席していました，と告白するようなものである．いずれにせよ，上記の箇所を自分で読めば理解できるはずです．］

Q.4　アテナイの時代にギリシア型の精神性（思索）のみが存在していたのでしょうか？

A.4　仰る通り，アテナイの時代にも，ヘレニズム型の精神性をもつ人はいたでしょうが，全体としてみればごく少数で，アテナイの時代の精神性を特徴付けるほどでなかったということだと思います．いつの時代にも，両方があり，どちらが優勢かという問題であると思います．

Q.5　アリストテレスの論理学はそんなにあいまいなままになっていたのでしょうか．

Q.6　「アリストテレスの三段論法」は現在でも有用だという話を聞くが，ホワイトヘッドは何をもって「アリストテレス論理学」が浅はかな武器だとしたのかよくわからない．

Q.7　「帰納」と「演繹」はこの授業では扱わないのでしょうか．

A.5,6＆7　もちろん，アリストテレスの論理学は，今でも有効ですし，中世の学者は，特に13世紀以降は，アリストテレスの論理学をよく理解していました．翻訳pp.507～508上段のWhiteheadの記述によれば，「量的関係」「多面的関係の複雑な諸関係」と言われているので，アリストテレスの論理学が命題論理で記述されるのに対して，Whiteheadが想定しているのは述語論理でないと記述できない内容があるということが考えられます．Whitehaedに中世についての知識に欠けるところがあるのは仕方ないでしょう．「帰納」は確率の問題になりますが，時間があれば言及したいと思います．

Q.0　・・・このレジュメの続きや今日印刷されていないページがあるなら欲しいです．
A.0　申し訳ありませんでした．仰る通り，p.11-12が，p.9-10と同じだったので，あらためて，本来のp.11-12（第７講ー非認知主義ーその２（前編）ー）を配付します．

Q.1　「ドアをしめることはよい」という場合に，相手が実際にドアをしめてくれたら検証ができたとは言えないのでしょうか？
A.1　検証できたとは言えません．この質問は，非認知主義（情緒主義）の主張を正確に理解するためには，よい質問です．確かに，「ドアをしめることはよい」という場合，カルナップによれば，「ドアをしめることはよい」ということを君も是認せよ，従って，もっと言えば，「ドアをしめろ」という命令を意味していると解されるわけですが，「ドアをしめることはよい」と発話された時点で，現実にドアは閉められていないから，検証できないのだとしてしまうと，時間が経過して，相手がドアを閉めれば（実は閉めなくても），命令に対応する事象（事実，出来事と言ってもよい）が生じるので，検証できるのではないか，と思ってしまいがちです．しかし，問題となっているのは，そういうことではありません．命令文は，時間の経過とともに，対応する事象に変化があってもなくても，そもそも原理的に検証できないということを主張しているのです．カルナップを含む論理実証主義の立場をとる人たちが論理学が扱う命題(proposition, Satz)として認めるのは，文法的に言うと，まず，
1)平叙文（「～である」と事実を叙述する文）S+V～.
2)疑問文（「～か？」と問う文）V+S ～?
3)命令文（「～せよ」と命令する文）V ～.
4)感嘆文（「なんと～なことか」と感嘆する文）What/How S+V ～!
のうち，1)平叙文だけであり（平叙文もすべてではなく，その一部），その他は，除外されます．それは，1)平叙文だけが，叙述された内容と対応する事象の一致・不一致を確かめる（検証する）ことができて，その平叙文，すなわち，命題が真である，とか，偽であるとか言うことができるからです．平叙文以外は，そもそも，命題ではないので，命題が真である，とか，偽であるとか言うことができないので，つまり，検証できません．従って，先の例で言えば，「君はドアを閉める」あるいは「君はドアを閉めた」であれば，命題（つまり平叙文）なので，検証できます．しかし，「ドアを閉めろ」は命令文なので，原理的に検証できないのです．ところで，もともとの「ドアをしめることはよい」は，実は，文法上の形式は平叙文です．しかし，先程，カルナップらが命題(proposition, Satz)として認めるのは，「平叙文だけであり（平叙文もすべてではなく，その一部）」と言いましたが，「ドアをしめることはよい」が，平叙文（すなわち，命題）として，叙述している事柄は，この文を発話している人の頭の中の考えです．その頭の中の考えを何らかの仕方で確かめることができると仮定した上で，「ドアをしめることはよい」が，叙述している事柄と，この文を発話している人の頭の中の考えが一致しているか否かを検証することはできます．しかし，「ドアをしめることはよい」は，平叙文であることに加えて，「ドアを閉めろ」という命令文の意味ももっているとすると，この部分については，検証できないということになります．

Q.2　倫理学と哲学との間の関係性は曖昧であるように感じました．
A.2　広い意味での哲学のなかに，善悪に関する価値判断を扱う倫理学と美醜に関する価値判断を扱う美学（芸術学）が含まれます．そもそも，哲学と倫理学は同一レベルで排他的に区別されるものではないので，大学の分野別の区分（制度）のほうがおかしいのです．

Q.0　哲学を学問とすると，狭い分野しか扱えず，哲学がなくなるといっていましたが，そうすると哲学の意義は一体何なのでしょうか？最近はよく，いろんな分野（芸術，スポーツ，料理etc...）で「哲学」という言葉を耳にします．それらと，先生が考える哲学の違いは何ですか？
A.0　はじめの「哲学を学問とすると」の「学問」は，個別学，領域学という意味でしょう．個別学，領域学も学問ですが，哲学も学問です．しかし，次の点に違いがあります．個別学，領域学は，対象とする領域を限定し，あらかじめ前提とする事柄は定義として使用し，原則として，その個別学，領域学の範囲内では，あらためてそれを論証することは求めません．これに対して，哲学は，究極的には，何も前提しません．最近（と言ってもせいぜい100年かそこら）では，と言っても近世以降のことですが，心理学（psychology)，社会学(sociology)，美学 (aesthetics)などが哲学から出ています．それより前には，物理学(physics)が出ていったことは御存じでしょう．それまでは，これらの個別学，領域学が扱う対象は，細分化されない形で，哲学が扱っていました．そうすると，哲学には，存在論(ontology)，認識論(epistemology)などしか残っていない，ということになります．しかし，その哲学にたずさわる（たずさわっているつもりの）人たちの中にも，（絶対者とか神とかを論じる）形而上学的傾向の人たちから，言語分析を手段とする論理実証主義の人たちまで，その幅は広く，何も前提としない，といっても，「前提としない」ということに程度の差があって，それに対しているような気がします．論理実証主義の人たちは，実は，プロトコル命題に還元できるセンス・データを前提しているという点で，哲学的ではない，と言えるかもしれません．それから，「～の哲学」と言われるときは，「～観」とか「～の見方」「～の方針」という意味でないでしょうか．19世紀末から20世紀始めに，ヘーゲル学派の影響が大きかった頃，何にでも「哲学的(philosophical)」とか「～の哲学」という語句をつけるので，「哲学」という言葉が，ほとんど意味をなさなくなった，ということがあります．

Q.1　情緒主義と日常言語学派の相違点がよく理解できなかったのですが，（情緒主義で）「プロトコル命題にさかのぼる」という表現がありましたが，それは時間軸というかなにか一直線上で考えるのがよいのでしょうか？
A.1　時間的にではなくて，原理的にさかのぼる，という意味なのですが，一直線上というのは，複線的，枝分かれ的なものを想定しているのですか？

Q.2　論理実証主義の難点(2)<p.12,l.526～>について，「私たちは日常，～（中略）～現実にはその意味するところを理解していることになる」というのは，（日常表現には感覚知覚に還元できないものが多く学問的に意味がないけれども）人々はその（無いはずの）意味を理解し共有しているという解釈で合っているでしょうか？
A.2　そういうことです．実は，発話者が何を意図して発話し，聞き手が何を理解したかが，食い違っているかもしれないけれども，そのとき，お互いが納得して，会話が成立しているとすれば，とりあえず，理解されたと見なすということです．「現実には」と言っているのが，「実際には」ということで，発話者の意図と聞き手の理解の食い違いがないことが前提されているような表現ですが，食い違いがあることは排除されていないので，それを確かめる方法を考えてみると面白いでしょう．

Q.0　哲学とは何ですかと学問として勉強していない人に聞かれたら，何と答えるか教えて下さい．
A.0　ヴィトゲンシュタインは，「ハエとりビンの中のハエに出口を教えること」と言っているようですが，相手の学識や関心によって変わるかも知れません．さしあたり，どのような活動・営み（学問や行為など）について，探究のための仮の前提をおいても，何も絶対的な前提をおかず，何故そうなのか，何故そうするのかを問い続けること，と答えるかもしれません．

Q.1　学としての哲学と「○○の哲学」というような部分でつかわれる哲学のちがいが少しわかりにくかったのです．どうして○○の哲学というように意味が派生していってしまったのでしょうか．
A.1　授業でも言ったつもりですが，「料理の哲学」とか「スポーツの哲学」という場合は，比喩的に使っているだけで，「料理の方針」とか「スポーツの基本的考え方」という意味に過ぎないと思います．幕府のいうことを忠実に守り従う人を「幕府の犬」というのと同じだと思います．しかし，何故「料理の数学」ではなくて，「料理の哲学」なのか，哲学以外の他の学問ではなくて，「哲学」がなぜこういう比喩的な言い方をされるのかは，哲学のほうに原因があるのかもしれません．

Q.2　情緒主義と日常言語学派の言語分析の目的の相違点を考えるときに，経験的知識とあいまい（な）表現を同様の物という前提で考えるのは，飛躍しすぎていますか？
A.2　情緒主義が「経験的知識（を表わす表現）をプロトコル命題に還元する」という場合と，日常言語学派が「あいまいな表現を明確化する」という場合に，還元されたり，明確化されたりするもとの「経験的知識（を表わす表現）」と「あいまいな表現」が，内容を問わずに，分析の対象になっているという点では，同様のもの（物？）と言えますが，内容を考慮すると，「経験的知識（を表わす表現）」のほうが「あいまいな表現」よりも対象とする範囲がずってせまく，ほとんど別物という感じです．

Q.3　都会的な態度とはどのようなものなのか．
A.3　実際，よくわかりません．しかし，ホワイトヘッドがプラトンの態度を「都会的」と形容するときの意味を理解するヒントが，『観念の冒険』のテクストの中にあるとすれば，p.104~106（邦訳p.489下段～p.493上段）の後半，プラトンとアウグスティヌスの対比にあると思います．これは，アテナイ型とアレクサンドリア型という区別に対応しているように思われます．ホワイトヘッドが，「都会的に(urbanely)」と言っている，urbanely（英語）は，ラテン語のurbanus(<urbs)にさかのぼることができますが，ラテン語の時点ですでに（ローマ時代に），本来の「都市の（都市を囲む城塞の）」という意味に加えて，「上品な，教養ある，洗練された，躾のよい，機知に富んだ，多才な，気のきいた」という意味で使われるようになっていたようです．プラトンとアウグスティヌスについて言えば，ある問題に関して，白黒ハッキリと態度を表明するのが，アウグスティヌスのほうで，こうも言えるが，別のようにも言える，というような言い方をするのがプラトンということになるでしょう．そして，どちらがよい，わるいというのではなくて，学問全体が進展するためには，両方が必要なのだ，というのが，ホワイトヘッドの立場なのだと思います．

Q.0　レポートは手書きですか．パソコンで打ってもいいでしょうか．
A.0　パソコンでお願いします．

Q.1　エレアからの客人との問答は無限ループのような気がするのですが・・・つづきが知りたいです．
A.1　プラトンの『ソピステス』を読んで下さい．

Q.2　哲学って何なのかむしろよくわからなくなりました（笑）
A.2　単にわからなくなっただけではなくて，哲学について，あなたがもっていた考え方を再検討しなければならないという気持ちになったのなら，それはよいことです．

Q.3a　パルメニデスがいうところの，在ることの根拠を静止しているものに求める部分について分かりづらかったです．またなぜ動・力にそれを求めるという主張から脱却しようとするのか．
Q.3b　エレア派にとっての"実在するもの"という定義がすごく理解しづらかったです．エレア派の人自身も困惑しているような印象を受けた会話文でしたが，やはり"実在する"戸言うなら，そのものが何かを考え，動くことが重要なのではないかなと個人的には感じました．
A.3　エレア派にとって，「あるものはあり，あらぬものはあらぬ」というのが至上命令なので，あるもの（実在）は動を受け入れません．従って，生成消滅するこの世界は，実在の現れ（現象）にすぎないと考えていたようです．

Q.4　「都会的な態度」の話で，私は「ぶぶ漬け」に代表される京都人を想起しましたが，いやらしい面としては，このようなものでよいのでしょうか．
A.4　なるほど．あたっていると思います．

Q.5　２世界説は少し都合の良すぎる考え方のように感じました．哲学が豊かな発想が必要ですね．哲学を研究している方々にとってゴールや到達点は存在しているんでしょうか？論文や書籍をまとめるとき，「やっぱり未だに納得のいく答えにたどりつけなかった」などの結論に落ちつくことも多くあるんですか？
A.5　哲学の研究の中でも，哲学史的研究，文献学的研究など，領域学・個別学のように対象領域を限定した研究では，一定の結論を出しますが，その限定をはずせば，そう簡単に納得のいく答えは出せないと思います．

Q.6　動（キーネーシス）について，そのものが知られることなどにより変化するというよりは，その知った側の人の中で，そのものに対する認識が変化しただけなのではないのかと思いますが，知られるということにより，ものが変化するとはどういうことでしょうか．
A.6　とてもよい質問です．我々の日常生活では，おっしゃる通りに考えて差し支えありません．しかし，ここで，知られる対象も何らかの変化（動）を被ると考えられています．それが，現在我々が考える物理的なレヴェルでの観測によるものか，それとも精神的なレヴェルでのことのなのか，その両方なのかは問題です．

Q.0　２月に入りました.
A.0　そうですね．なんだか，生協の「ひと言カード」みたいなやりとりですね.

Q.1　授業プリント以外で参照するために何かオススメの分（ママ，文？）献などありますか？哲学の知識は，授業内容等以外はほぼ０なので，できるだけ易しめの分（ママ，文？）献がよいです.
A.1　授業で主に扱った，ホワイトヘッドの『観念の冒険」について言えば，

V.ロウ（大出晁／田中見太郎訳）『ホワイトヘッドへの招待』，松籟社，1982.
田中裕『ホワイトヘッド-有機体の哲学』，講談社，1998.
中村昇『ホワイトヘッドの哲学』，講談社，2007.

などで，入門的な知識を得ることも結構ですが，それよりも，『観念の冒険』の当該箇所に訳注で言及されていた，

プラトン『ソピステス』，『ティマイオス』，『国家』／アリストテレス『形而上学』第12巻／ルクレティウス『事物の本性について』／デカルト『哲学原理』／ヒューム『人性論』

などを翻訳で結構ですから，当該箇所とその前後を読んで，『観念の冒険』では，どういう意味で言及されていたのかを確かめる作業をするほうが，よほど勉強になりますし，その成果はレポートの題材になります.

Q.2　規約説は，「そう決めたからそうなのである」と理解したが，p.536~537にかけての説明を読んで全く分からなくなった．では，「規約」は，誰が何を持って「規約」としているのか？
A.2　ポアンカレの場合は，言語における文法のようなものを規約とみなし，物理学においても，基本概念や原理は規約的に設定され，個々の経験内容は変化する，というのです．しかし，その規約の設定は，個人が恣意的にどうにでもできるというわけではなくて，その学問が現に成立している社会内で歴史的に一定の合意を得て成立している，ということをホワイトヘッドは示唆しているように思われます.

Q.3　パルメニデスについて関心をもったので，プラトンと合わせて文献を読みたいと思った.
A.3　是非，読んで下さい.

Q.4　「都会的な態度」って何？と思ってて，今日コメントで，京都人のような，と書かれてて納得したような，そうでもないような．いまだに京都の人間は，都は京にあり，を半ば本気で信じているので（少なくとも私は幼い頃からそう洗脳されてきました・・・），どこかお高くとまっているのかもしれませんね．東京，大阪よりも，その気質はあるなーと我ながら思いました.
A.4　確かに，御所といえば，京都御所のことですから．ところで，京都人が前の戦争と言うとき，念頭においているのは，応仁の乱だというのは，本当ですか？